

第3学年 道徳科学習指導案

は組 男子 18 名 女子 17 名 計 35 名

指導者 永 田 佑

1 主 題 名 こまっていたら

B「親切、思いやり」 相手のことを思いやり、進んで親切にすること。

2 主題について

(1) 主題の位置とねらい

この期の子どもたちは、これまでに、学校や日常生活などにおける身近な人々とのかかわりの中で、相手に対して親切にすることで、自他共に快い気持ちになり、気持ちよく生活できることにつながることを理解し、進んで親切な行いをしようと努力してきている。しかし、自分本位な考えや無関心などから、進んで親切な行いをしたいと思いつつもなかなか実行できなかったり、自分の思いを優先し、相手のことをよく考えずに思いやりのない言動をとったりしてしまうこともある。このようなことから、この期の子どもたちに、相手の気持ちや状況などを自分のこととして考え、行動しようとするのが、互いに気持ちよく生活を送ることにつながることを理解させ、相手に対して思いやりの心を持ち、進んで親切にしようとする態度を育てる必要がある。

そこで、本主題では、相手が困っている状況にあると分かりながらも、親切な行動に移せない場面で生じる心情や心情の変化を、自らの体験場面と関係付けて類推しながら追究する活動を通して、相手の気持ちや状況などを考えて行動しようとするものの大切さを理解し、相手に対して思いやりの心を持ち、進んで親切にしようとする心情を育てることをねらいとしている。さらには、相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする生き方は、みんなが明るく気持ちよく過ごせることにつながることを実感し、これからの生活の中で生かしていこうとする意欲を高めていくこともねらいとしている。

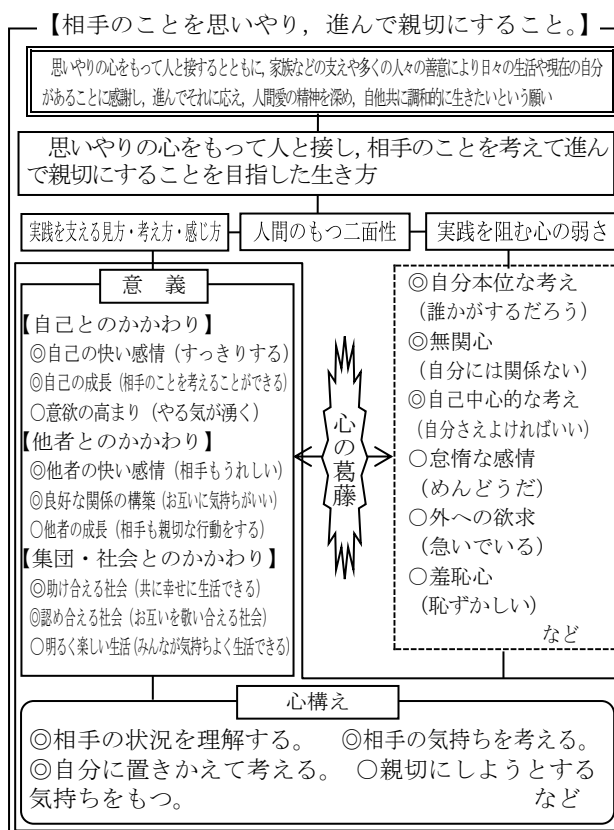
このような学習を通して身に付けた見方・考え方・感じ方は、相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする生き方を深く追究していく学習へと発展していくことになる。

(2) 指導の基本的な立場

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとするについて、人間のもつ二面性に着目して人間理解を深めるという立場から分析すると右の図のようになる。

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとするとは、相手の置かれている状況を見て、気持ちを感じ取り、相手のことを考えて親切な行いを進んですること、そのことによって、お互いに快い気持ちになることと捉えることができる。

ここでは、思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深め、自他共に調和的に生きたいという願いを基に、思いやりの心をもって接し、相手のことを考えて進んで親切にしようとする生き方とし、その実践を支える見方・考え方・感じ方（意義や心構え）と実践を阻む心の弱さの両面から、人間理解を深めていくことになる。



◎は重点的な学習内容

具体的には、思いやりの心をもって接し、相手のことを考えて進んで親切にすることで、自分の気持ちがすっきりしたり自己の成長につながったりすることや、相手も快い感情になり、みんなが助け合ってお互いに認め合える生活を築いていくことができるようになることなどを理解させる必要がある。その一方で、親切な行いをしようと思いつつも、「誰かがするだろう」といった自分本位な考え、「自分には関係ない」といった無関心などの心の弱さからなかなか実践できないことがあることにも気付かせるようにする。そして、それらの弱さと望ましい生き方との間に起こる心の葛藤を乗り越えていくためには、相手の状況を理解することや相手の気持ちを考えることなどの心構えをもつことが大切であることも理解させる必要がある。

このような内容にかかわる生き方への共感を高めるために、本主題では読み物教材「ぐみの木と小鳥」（日本文教出版）を取り上げることにした。この教材は次のような粗筋である。

友達のりすが姿を見せないことを心配していたぐみの木の代わりに、ぐみの実を持ってりすの様子を見に行く小鳥。数日後、激しい嵐の中でも、りすのところへぐみの実を届けに行き、りすが元気を取り戻し、ぐみの木も喜ぶという内容である。

この教材を扱うに際し、話の内容の理解を深め、主人公の心情に十分に触れさせるために、一枚絵を活用する。また、子どもたちの生活場面を振り返らせ、そこでの心情と主人公との心情を関係付けて類推させながら、主人公の心情や心情の変化に自我関与させる。

具体的には、まず切実感のある自分の考えていきたい問題を追究していくために教材の一読から、小鳥が親切な行いをする場面に焦点化する。次に、大変な思いをしているりすや助けたくても動けないぐみの木の状況を考え、小鳥がりすの様子を見に行く場面で、相手のことを思いやり、進んで親切にすることにかかわる意義や心構え、またそれを阻む心の弱さを多面的・多角的に追究させる。その際、自分の生活の経験における心情と関係付けながら、主人公のとった行動とその背景にある心情を追究させるために、多様な道徳的価値観を受容する学び合いを取り入れる。さらには、自分の考えていきたい問題についてまとめていく中で、学習を通して変わったり確かになったりした自分の考えやその理由、それにつながる生活場面を意識させることで、よりよい実践への意欲や期待感を高めさせる。

このような過程を重視する学習を通して得られる能力や態度は、思いやりの心をもって接し、相手のことを考えて進んで親切にすることを目指す生き方をしていこうとする喜びや楽しさとなり、そのことが自分の生き方についての考えを深めることにつながり、豊かな自分の生き方を追究し続けることになると思う。

(3) 子どもの実態

本学級の子どもたちの相手のことを思いやり、進んで親切にすることにかかわる経験や、実践を阻む心の弱さ、実践を支える見方・考え方・感じ方（意義・心構え）等についての認識は以下のとおりである。

〔表 1〕相手のことを思いやり、進んで親切にできた経験（総反応数 83）とその時の感情（総反応数 44）

経 験	反応数 (人)	その時の感情	反応数 (人)
落とし物を拾ったり、忘れ物を貸したりする	42	大丈夫かな、心配だ	26
困っている人に声をかけたり、遊びにさそったりする	20	自分にできることをしたい	14
荷物を持ったり、分からないことを教えてあげたりする	11	喜んでくれるかな	4
電車やバスの中で、席を譲る	10		

〔表 2〕相手のことを思いやり、進んで親切にできなかった心情（総反応数 39）

心 情	反応数 (人)	心 情	反応数 (人)
自分本位な考え（誰かがするだろう）	11	怠惰な感情（めんどうだ）	5
無関心（自分には関係ない）	11	外への欲求（急いでいる）	2
自己中心的な考え（自分さえよければいい）	9	羞恥心（恥ずかしい）	1

〔表 3〕実践を支える見方・考え方・感じ方（意義）についての認識（総反応数 116）

見方・考え方・感じ方	反応数 (人)	見方・考え方・感じ方	反応数 (人)	見方・考え方・感じ方	反応数 (人)
対 己		対 己		対 己	
うれしい、すっきりする	29	うれしい、すっきりする	27	気持ちよく過ごせる	14
次もやろうと思う	11	気持ちよく過ごせる	8	自分もやろうと思う	14
自己の成長につながる	1	自分もやろうと思う	3	笑顔が広がる	9

〔表4〕 実践を支える見方・考え方・感じ方（心構え）についての認識（総反応数 40）

見方・考え方・感じ方	反応数 (人)	見方・考え方・感じ方	反応数 (人)	見方・考え方・感じ方	反応数 (人)
優しくしたい、親切にしたいという気持ち	22	自分から行動しようという気持ち	3	後のことを考える	1
相手の気持ちを考える	11	勇気を出す	3		

〔表1〕の「大丈夫かな、心配だ」「自分にできることをしたい」等の感情が多いことから、相手のことを考えて、自分から親切な行いができた経験が多いことが考えられる。また、〔表3〕から、進んで親切にすることが「自分や相手、社会全体が気持ちよく過ごせる」という意義につながっていると感じている子どもが多いことが分かる。その反面、〔表2〕の「誰かがするだろう」「自分には関係ない」といった感情から、様々な場面において相手のことを思いやり、進んで親切にすることの難しさを感じていることが分かる。さらに、〔表4〕から、「相手の様子を見てよく考える」「自分だったら、どんな気持ちでいるか」といった相手の状況や気持ちを自分に置き換えて考え、自分から進んで親切な行いをしようとする気持ちや考えをもっている子どもは少ない。

これらの実態から、「相手の状況を理解する」「相手の気持ちを考える」などの心構えや、「自他共に気持ちよく生活できる」「お互いを助け合える」などのよさを関係付けて考えさせたり、自分本位の考えで行動できないでいることが望ましい結果につながらないことを関係付けて考えさせたりして、相手のことを思いやり、進んで親切にすることとは、どのようなことかを深く追究させる必要がある。

一方、道徳科において、本学級の子どもたちは、問題意識をもって学習に取り組む姿は見られるが、主人公の心情やその背景と自らの生活場面を関係付けて考え、互いの考えを比較したり関係付けたりしながら、道徳的価値に対する見方・考え方・感じ方を十分に深め、広げるまでに至っていない。そこで、多様な道徳的価値に対する見方・考え方・感じ方に触れさせていく際に、自分の立場を明確にさせながら、互いの考えやその理由を交流させる必要がある。さらに、学習を通して、自分自身の見方等がどのように変わったか、その理由は何かなどを明確にさせてまとめていく必要がある。

(4) 指導上の留意点

本主題の指導を展開するにあたっては、相手のことを思いやり、進んで親切にすることの生き方のよさを主体的に追究することを通して、実感を深める中で、子どもたちがこれまでの生活の中で体験して感じてきた道徳的価値にかかわる意識が、これからの生き方へと連続し、発展していくようにしたい。

ア 切実な問題意識をもたせるために、これまでの体験場面を振り返らせ、親切にできた経験とできなかった経験の背景にある心情を比較して考えさせることによって、共通点や差異点を基に、疑問や矛盾から子ども一人一人が考えていきたい問題を設定させるようにする。

イ 主人公の心情や心情の変化に共感させたり、ここでの道徳的価値について見方等を十分に深めたり広げたりさせるために、小鳥がぐみの木にりすの様子を見に行くように頼まれた場面に焦点化し、多様な道徳的価値観を受容する学び合いを行う。その際、子どもたちに、激しい嵐の中でも行くことができるか、またその理由を表出させることで自分の立場を明確にし、それぞれの見方等を比較しながら、話し合わせる。そして、相手の状況や気持ちを考えていても、行動に移さなければ相手にとってよい結果にはつながらないことと、ここでの意義・心構えである「相手の状況を理解する」「相手の気持ちを自分のこととして考える」「進んで親切にできると、お互いに助け合って生活できる」といった見方等を関係付けて考えさせていく。

ウ この内容にかかわる自己の生き方についての考えを深め、これからの生活とのつながりを感じ、これからの生かしていこうとする意欲を高めさせるために、自分の生き方を振り返らせる。その際、教材中の主人公の考えや話し合い中の友達の考えなど、自分の見方等が広がったり深まったりした理由を明確にさせる。さらに、自分のこれからの生活の中で生かせそうな場面を明確にし、その場面で大切にしたい気持ちや考えは何かを考えさせ、見方等の変容やその要因を意識させるようにする。

3 本 時

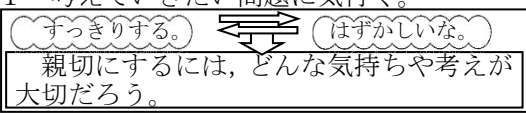
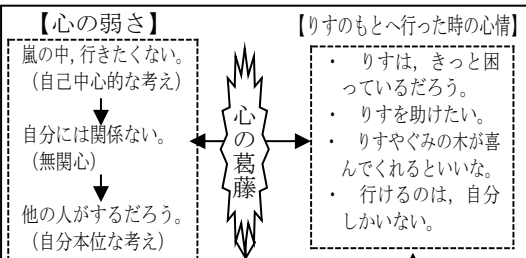
(1) ねらい

- ア 相手のことを思いやり、進んで親切にすることにかかわる自分自身の生き方を見つめ、思いやりの心をもって人と接し、相手のことを考えて進んで親切にしようとする気持ちを高めることができる。
- イ 相手のことを思いやり、進んで親切にすることにかかわる見方・考え方・感じ方を他者とのかわりの中で、自らの体験場面での内面と関係付けて類推しながら考え、表現することができる。
- ウ 自分本位な考えや無関心などの心の弱さから、進んで親切にすることができなかったことに気付くとともに、相手の気持ちや状況を考えて行動すると、お互いの快い気持ちにつながるなど、進んで親切にすることの意義や心構えの大切さを理解することができる。

(2) 本時の展開に当たって

多様な道徳的価値観を表出して追究させるために、「激しい嵐の中でも、りすのところへ行くことができるだろうか。」と問い、「相手の状況や気持ちを考えて、行く」、「自分が大変なときは難しい」、「どうすればよいか分からない」といったそれぞれの捉えを基に、その背景にある理由や考えを明確にして、互いの見方等を比較しながら展開していく。

(3) 実 際

過程	主 な 学 習 活 動	時間	教師の具体的な働きかけ
気付く	1 考えていきたい問題に気付く。  親切にするには、どんな気持ちや考えが大切だろう。	(分) 7	○ 切実な問題意識をもたせるために、親切にできた時とできなかった時の状況や心情を挙げさせる。その際「どんなときでも、親切にできるだろうか。」と問い、それらの疑問や矛盾から問題意識をもたせる。
さぐる	2 教材「ぐみの木と小鳥」を読み、考えていきたい問題について話し合う。 (1) 小鳥の心情、心情の変化について感想をもち、発表する。 (2) 小鳥がりすのもとへ行った気持ちや考えと、りすやぐみの木の気持ちについて、話し合う。 	14	○ 教材を感動的に読み取らせ、主人公の心情への共感を高めるために、教材を一読する前に登場人物を簡単に紹介し、「どんな親切があるだろう。」と、問う。 ◎「激しい嵐の中でも、りすのところへ行くことができるだろうか。」 ○ 主人公の気持ちを自らの体験場面での内面と関係付けて考えさせるために、主人公の行動に対する自分の立場を表出させ、その理由や考えを明確にさせる。
見つける	【心】の弱さ 嵐の中、行きたくない。 (自己中心的な考え) ↓ 自分には関係ない。 (無関心) ↓ 他の人がするだろう。 (自分本位な考え) ↓ 【心構え】相手の気持ちや状況を考える。自分から進んで行動に移す。相手がしてほしいことを考える。 など	14	○ 「相手の状況や気持ちを考える」「自分が大変なときは、親切にするのは難しい」「どうすればよいか分からない」といったそれぞれの見方等を基に、多様な道徳的価値観を受容する場を設定する。その際、相手のことを思って行動に移す見方等と、自分の置かれている状況を優先する見方等を意図的に交流させることで、「親切にしたい気持ちがあっても、状況によっては難しい」といった心の弱さに共感させる。 ◎「そこまで、相手に親切にできるだろうか。」 ○ 望ましい生き方を実践するのは難しいが、道徳的価値を大切に、よりよく生活したいという気持ちを高めるために、「相手の状況や気持ちを考える」、「自分から進んで行動に移す」などの考えと、互いの快さを自分の生活場面と関係付けて考えさせる。
深める	(3) 主人公の生き方を振り返り、自分と友だちの考えで感じたことや考えたことを発表し合う。 相手の様子をよく見て、もし、自分だったらと考えられたいいな。	8	◎「今日学んだことは、これからの自分の生活の中でどんなときに生かせそうですか。」 ○ 新たなる再構成された道徳的価値観を基に、具体的な生活場面を想起しながら、自分なりの考えをまとめさせる。その際、これからの生き方について、具体的に生かせそうな場面を想起させながら、振り返らせる。
見通す	3 学習したことを振り返り、自分の考えていきたい問題に対して、自分なりの考えをまとめる。 困っているのが分かったら、相手の気持ちになって自分から親切にしたいな。	2	○ 学習したことへの価値付けとこれからの生き方について期待感をもたせるために、説話を行う。
	4 相手のことを思いやり、進んで親切にすることにかかわることについて教師の説話を聞く。		